資料４　有識者会議資料（第２回）

ちよだリテラシー教育

令和７年度「ちよだリテラシー教育」の取組について

１　背景

ＳＮＳなどの普及により情報発信・取得が容易になった現代では、自分の考えをもち、情報を正しく判断する力が重要である。こうした力を育むために「ちよだリテラシー教育」を推進し、特にメディアリテラシーの育成に力を入れていく。

２　目指すべき子どもたちの姿

「情報を読み解き自己の信念に従って行動ができる人」（千代田区子育て・教育ビジョンより）

３　育成する力

（１）　善悪を判断して行動する力

（２）　類似情報を比較する力

（３）　事実と意見を区別する力

（４）　批判的に読み解く力

（５）　発信者の意図を考える力

（６）　確かな情報を見極める力

（７）　自分の考えを形成する力

４　学校での取組

（１）　国語科を中心とした言語能力を育む指導の充実

（２）　読書活動の充実

（３）　資料やデータの見方・活用における指導の充実

（４）　情報モラル教育の充実

（５）　ＡＩなど新たな技術の体験・活用

５　教育委員会及び学校のこれまでの取組

（１）　目指す姿、育成する力、学校での取組を可視化（各学校は教育課程に記載）

（２）　メディアリテラシーに関する資料を整理・作成

（３）　管理職向け研修

（４）　児童・生徒向け実態調査

（５）　各学校の「ちよだスマートスクールの」での授業公開、講演会等

（６）　各学校独自の取組（外部団体を活用したセーフティ教室、ビブリオバトル等）

６　児童・生徒向け実態調査について（質問項目は裏面参照）

実施時期：令和７年５月８日（木）から令和７年５月 30 日（金）まで

対　　象：小学校５～６年生及び中学校・中等教育学校前期課程の児童・生徒

結　　果：〇高い達成度が示された内容

インターネット上での配慮や自分の行動の影響

●今後重点的に育成が必要な内容

信頼性の高い情報の見極め、事実と意見の区別、情報を批判的に読み解く力

【質問項目】

小学校５～６年生	**中学校/中等教育学校（前期課程）**
善悪を判断して行動する力	
1.ネット上で発信するときに、相手を傷つけないための注意点を考えることができる。	1.オンラインでのコミュニケーションを図る際、適切な発信を心がけることができる。
2.自分の行動が周囲にどのような影響を与えるか考え、迷惑をかけないよう判断することができる。	2.自分の行動が社会にどのような影響を与えるかを深く考え、責任ある判断をすることができる。
類似情報を比較する力	
3.複数の方法を組み合わせて、どちらがより信頼できる情報かを考えることができる。	3.複数の情報源を比較し、それぞれの特徴や信頼性を分析することができる。

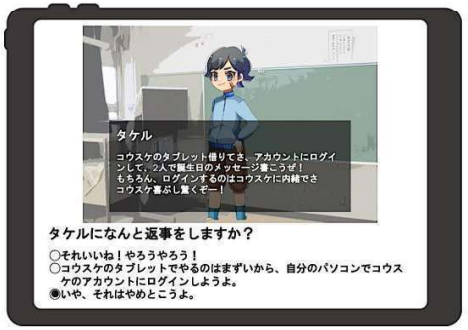
4.いくつかの意見を比べて、自分が賛成できるものを選ぶことができる。	4.異なる視点の意見を比較し、それらの背景や論拠を分析しながら、自分の立場を整理できる。
事実と意見を区別する力	
5.「事実」と「自分の考え」に分けて文章を書くことができる。	5.ニュースや記事を読んだとき、事実と意見を正しく分けながら、自分の考えを書くことができる。
6.ニュースや記事を読んで、どこまでが事実でどれが意見かを見つけることができる。	6.ニュースや記事の中で、客観的事実と解説・意見を区別することができる。
批判的に読み解く力	
7.ニュースや記事などの情報を簡単に信じず、疑いながら読むことができる。	7.映像作品や報道がどのようなメッセージを伝えているかを批判的に考察することができる。
8. 他者の主張や考えなどに触れたときに、矛盾点があれば指摘することができる。	8.本や記事の論点を整理し、問題点や矛盾点を指摘することができる。
発信者の意図を考える力	
9.作者や筆者、発表者の考えや意図を考えながら読んだり聞いたりすることができる。	9.本や映像作品など、作者の意図やねらいを考えながら読んだり視聴したりすることができる。
10.同じ出来事でも発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる。	10.ニュースや記事、人の話は、発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる。
確かな情報を見極める力	
11.インターネットの情報を正しいかどうか確認することができる。	11.インターネットから信頼できる情報を選ぶことができる。
12.調べた情報の出典を確認し、信頼性を考えることができる。	12.情報の発信元の違いを分析し、それぞれの信頼性について考えることができる。
自分の考えを形成する力	
13.自分の意見を他の人に説明するときに、そう考えた理由もしっかり伝えることができる。	13.自分の意見を論理的に整理し、他者に根拠を示しながら伝えることができる。
14.他の人の意見を聞いて、自分の考えに付け加えたり新しい考えをもったりすることができる。	14.意見をもった後も、新たな情報を踏まえて柔軟に考えを見直すことができる。

令和8年度　リテラシー教育の推進

「ちよだリテラシー教育」の推進



①区独自のメディアリテラシー検定及び教材開発



画面イメージ：状況判断編

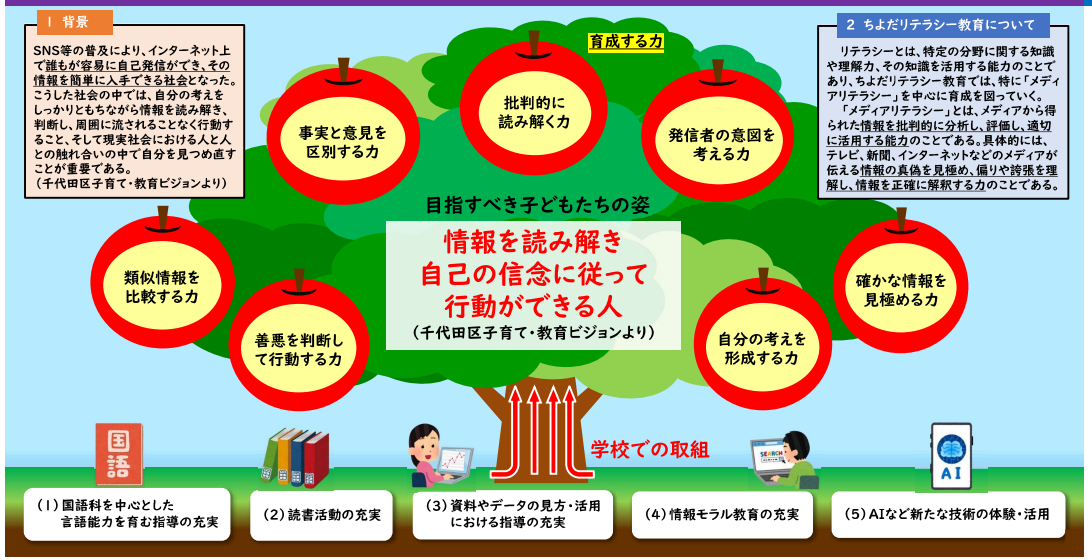


画面イメージ：個人診断レポート

②小学校高学年から授業で生成AIを活用
③読解力向上ワークシートの導入
④子ども新聞、中高生新聞を配架

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
①メディアリテラシー検定					→	→	→	→	→			
②学校用生成AIシステム「アイミー」					→	→	→	→	→	→	→	→
③読解力向上ワークシート					→							
④子ども新聞、中高生新聞	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

「ちよだリテラシー教育」の推進



令和7年度「ちよだリテラシー教育」における教育委員会及び学校の取組

①目指す姿、育成する力、学校での取組を可視化



○教育課程届出説明会にて説明
○各学校が教育課程に記載
○校園長会、副園校長会、各種研修等で周知

②メディアリテラシーに関する資料を整理・作成



○国語科の年間指導計画　○事例で学ぶNetモラル
○企業等による出前授業　○NHK for School
○GIGAワークブックとうきょう　等を掲載

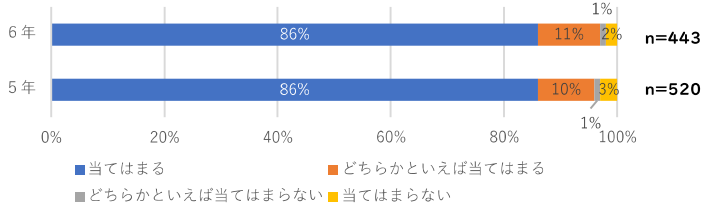
③管理職向け研修（5/7）　④児童・生徒向け実態調査（5月末）
⑤各学校の「ちよだスマートスクールの日」での授業公開、講演会等
⑥各学校独自の取組

学校での取組を支援

善悪を判断して行動する力

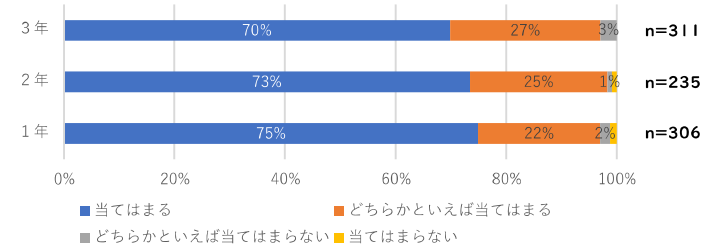
1.ネット上で発信するときに、相手を傷つけないための注意点を考えることができる。

小学校



1.オンラインでのコミュニケーションを図る際、適切な発信を心がけることができる。

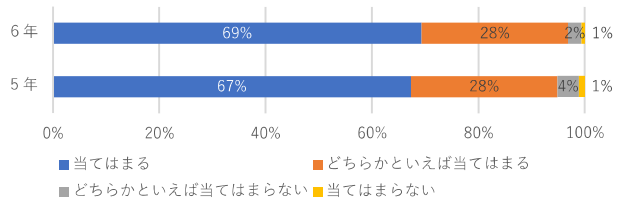
中・中等



善悪を判断して行動する力

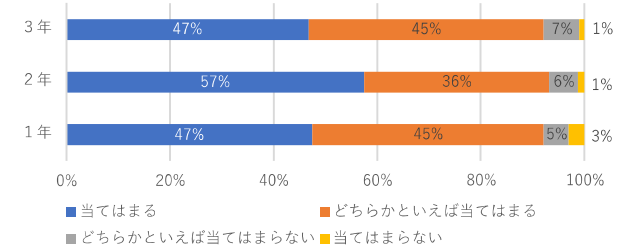
2.自分の行動が周囲にどのような影響を与えるか考え、迷惑をかけないよう判断することができる。

小学校



2.自分の行動が社会にどのような影響を与えるかを深く考え、責任ある判断をすることができる。

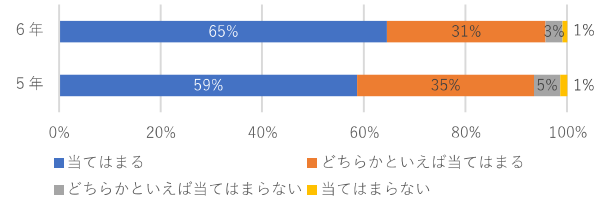
中・中等



類似情報を比較する力

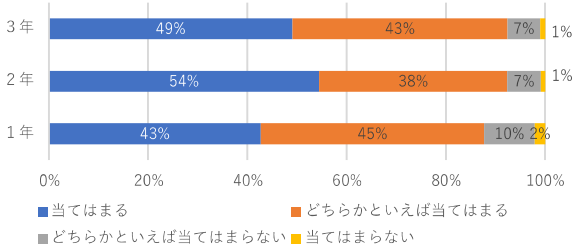
3.複数の方法を組み合わせて、どちらがより信頼できる情報かを考えることができる。

小学校



3.複数の情報源を比較し、それぞれの特徴や信頼性を分析することができる。

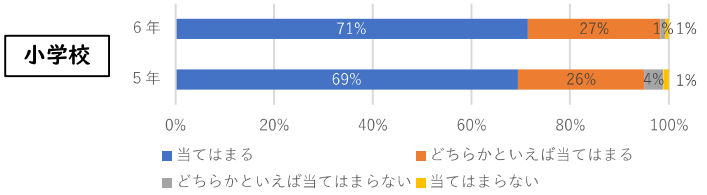
中・中等



類似情報を比較する力

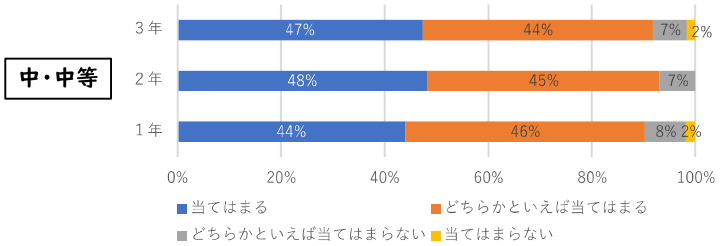
4.いくつかの意見を比べて、自分が賛成できるものを選ぶことができる。

小学校



4.異なる視点の意見を比較し、それらの背景や論拠を分析しながら、自分の立場を整理できる。

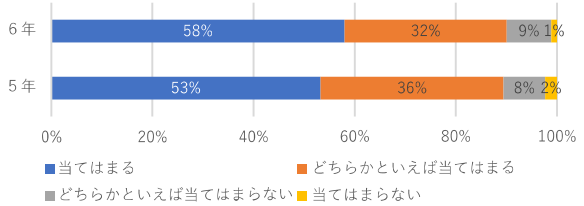
中・中等



事実と意見を区別する力

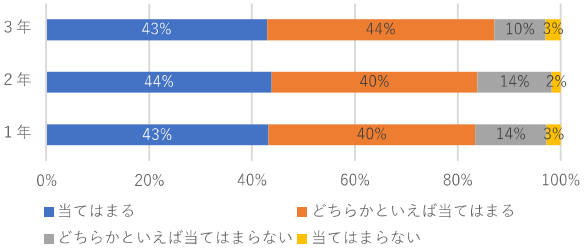
5.「事実」と「自分の考え」に分けて文章を書くことができる。

小学校



5.ニュースや記事を読んだとき、事実と意見を正しく分けながら、自分の考えを書くことができる。

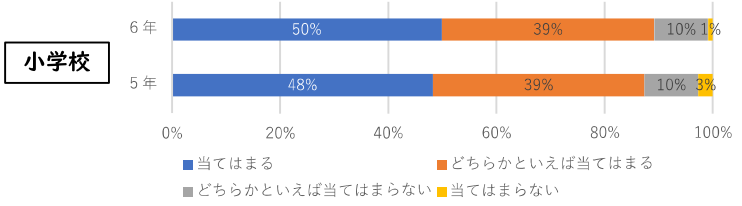
中・中等



事実と意見を区別する力

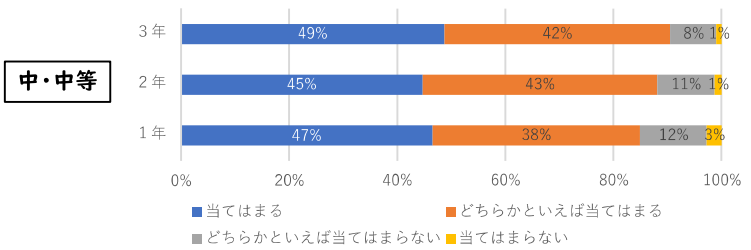
6.ニュースや記事を読んで、どこまでが事実でどれが意見かを見つけることができる。

小学校



6.ニュースや記事の中で、客観的事実と解説・意見を区別することができる。

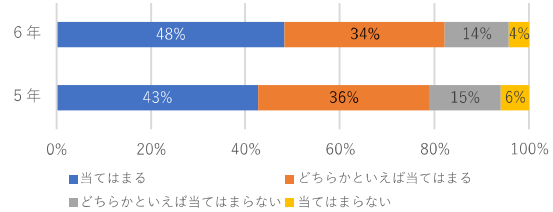
中・中等



批判的に読み解く力

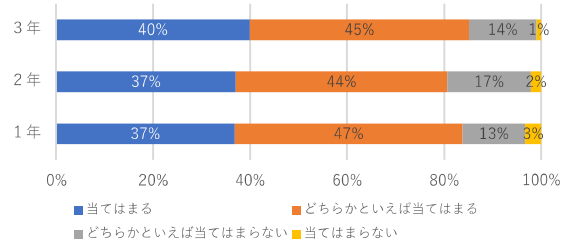
7.ニュースや記事などの情報を簡単に信じず、疑いながら読むことができる。

小学校



7.映像作品や報道がどのようなメッセージを伝えているかを批判的に考察することができる。

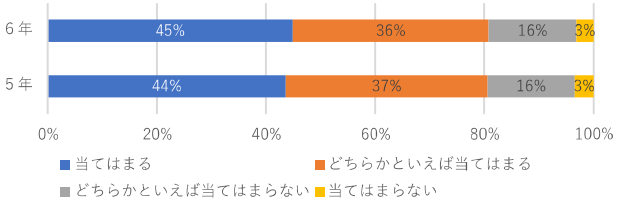
中・中等



批判的に読み解く力

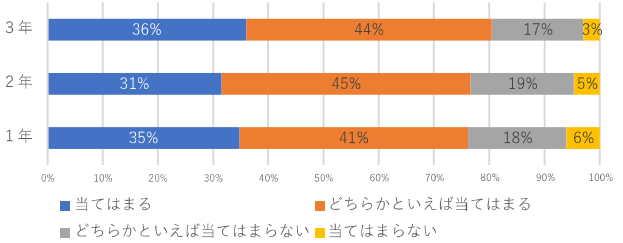
8. 他者の主張や考えなどに触れたときに、矛盾点があれば指摘することができる。

小学校



8.本や記事の論点を整理し、問題点や矛盾点を指摘することができる。

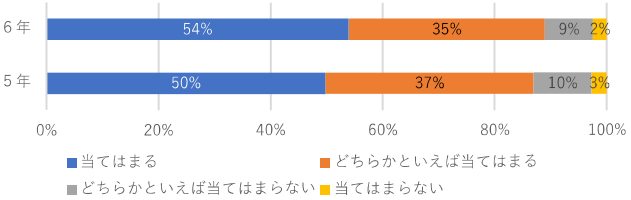
中・中等



発信者の意図を考える力

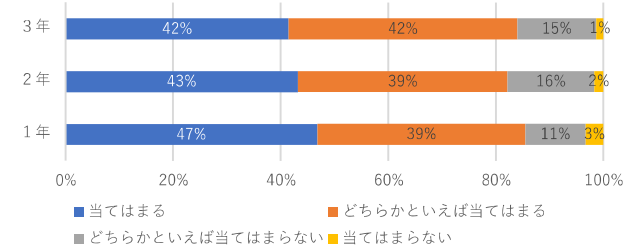
9.作者や筆者、発表者の考えや意図を考えながら読んだり聞いたりすることができる。

小学校



9.本や映像作品など、作者の意図やねらいを考えながら読んだり視聴したりすることができる。

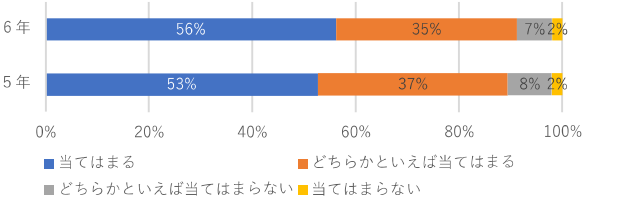
中・中等



発信者の意図を考える力

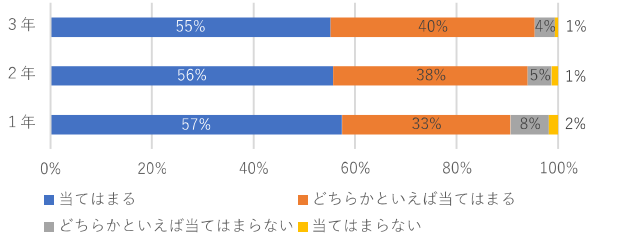
10.同じ出来事でも発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる。

小学校



10.ニュースや記事、人の話は、発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる。

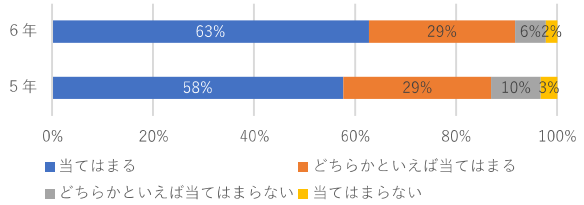
中・中等



確かな情報を見極める力

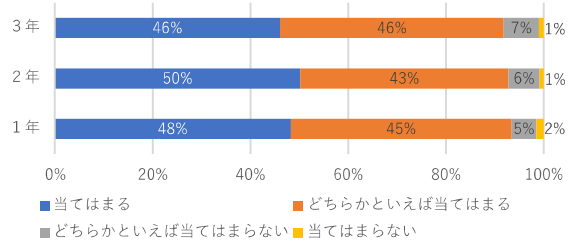
小学校

11.インターネットの情報を正しいかどうか確認することができる。



中・中等

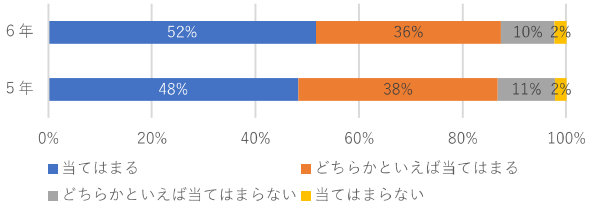
11.インターネットから信頼できる情報を選ぶことができる。



確かな情報を見極める力

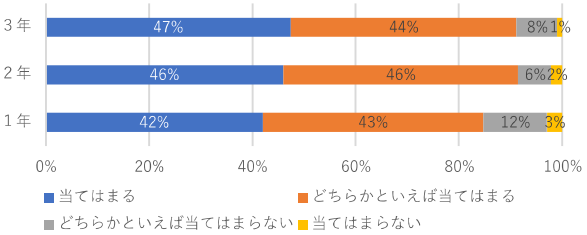
小学校

12.調べた情報の出典を確認し、信頼性を考えることができる。



中・中等

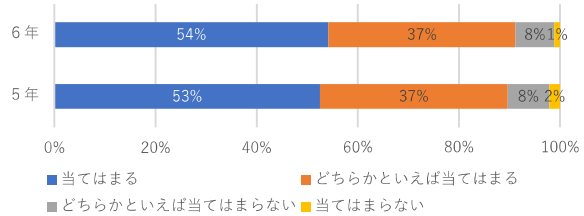
12.情報の発信元の違いを分析し、それぞれの信頼性について考えることができる。



自分の考えを形成する力

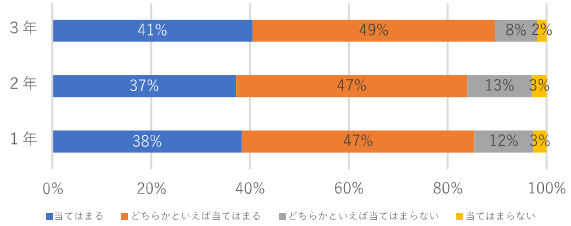
小学校

13.自分の意見を他の人に説明するときに、そう考えた理由もしっかり伝えることができる。



中・中等

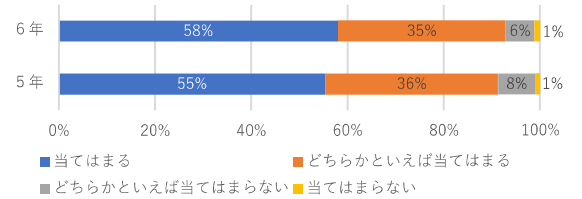
13.自分の意見を論理的に整理し、他者に根拠を示しながら伝えることができる。



自分の考えを形成する力

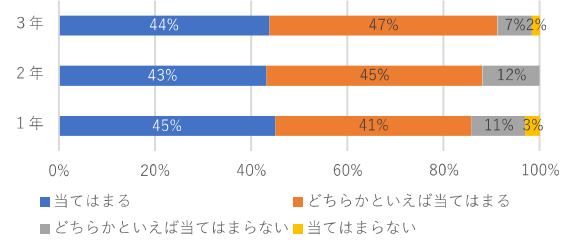
小学校

14.他の人の意見を聞いて、それをもとに新しい考えをもつことができる。



中・中等

14.意見をもった後も、新たな情報を踏まえて柔軟に考えを見直すことができる。



実態調査結果の分析・考察

千代田区が目指す「情報を読み解き 自己の信念に従って 行動ができる人」の育成 に向けた、児童・生徒の現在のリテラシー能力について、調査結果から以下の点が読み取れます。

1. **比較的高い能力が示された項目：**

- **オンラインコミュニケーションにおける配慮（「ネット上で発信するときに、相手を傷つけないための注意点を考えることができる」など）**
    - 小学校５・６年生、中学校・中等教育学校のいずれの学年においても、「当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」を合わせると非常に高い割合を示しています。これは、オンライン上での適切な発信や他者への配慮に関する情報モラル教育が一定の効果を上げていることを示唆しています。

- **自己の行動が周囲・社会に与える影響の認識（「自分の行動が周囲にどのような影響を与えるか考え、迷惑をかけないよう判断することができる」など）**
    - 小学校５・６年生で 95～97%、中学校・中等教育学校で 92～93%が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答しており、自らの行動に対する責任感や配慮の意識は概ね高いと言えます。これは「善悪を判断して行動する力」の基礎が備わっていることを示しています。

- **発信者の立場による伝え方の違いの認識（「同じ出来事でも発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる」など）**
    - 小学校５・６年生で 90～91%、中学校・中等教育学校で 90～95%が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答しており、発信者の意図を考える上での重要な視点である「発信者の立場」への意識は比較的高い水準にあります。

2. **育成に課題が見られる項目（特に注力すべき点）：**

多くの項目で、特に**中学校・中等教育学校の生徒において「当てはまる」と回答する割合が小学校よりも低い、または学年が上がるにつれて低下する傾向**が見られ、より高度なリテラシー能力の育成に課題があることが示唆されます。

- **確かな情報を見極める力（「複数の方法を組み合わせて、どちらがより信頼できる情報かを考えることができる」など）**
    - 複数の情報源を比較し信頼性を分析する能力については、小学校６年生で63%が「当てはまる」と回答している一方で、中学校３年生では 46%にまで低下しています。また、「インターネットの情報を正しいかどうか確認できる」という問いでも、中学校の生徒では「当てはまる」が 50%を下回っており、情報源の分析や信頼性判断は特に課題です。

- **事実と意見を区別する力（「ニュースや記事を読んだとき、事実と意見を正しく分けながら、自分の考えを書くことができる」など）**
    - 文章中で事実と意見を区別して書く能力、またニュースや記事から事実と意見を見つける能力ともに、小学校で 50%台、中学校では 40%台と低い傾向にあります。これは、情報リテラシーの根幹をなすスキルであり、強化が急務です。

- **批判的に読み解く力（「ニュースや記事などの情報を簡単に信じず、疑いながら読むことができる」「他者の主張や考えなどに触れたときに、矛盾点があれば指摘することができる」など）**
    - 情報の批判的吟味や矛盾点の指摘といったより高度な批判的思考能力は、全学年を通して「当てはまる」が 50%を下回り、特に中学校では 30%台と非常に低い割合となっています。生徒が情報を鵜呑みにせず、主体的に評価する力が不足している可能性があります。

- **自分の考えを形成する力（「自分の意見を他の人に説明するときに、そう考えた理由もしっかり伝えることができる」など）**
    - 自分の意見を論理的に整理し、根拠を示して他者に伝える能力については、小学校で 50%台であるのに対し、中学校では「当てはまる」が 40%を下回っており、表現力と論理的思考力の不足が課題です。また、新たな情報に基づいて柔軟に考えを見直す力も中学校では 40%台と低い傾向にあります。

今後の取組に関する提案

上記の分析を踏まえ、「ちよだリテラシー教育」の目指す姿に近づくために、特に課題が見られた項目を中心に、以下の取り組みを提案します。

1. **国語科を中心とした取り組みの強化**
    - **「事実と意見の区別」を徹底する授業実践：** 新聞記事やインターネット上の記事、評論などを教材に、**客観的事実と筆者の意見・解釈を明確に区別する演習**を繰り返し行います［強化したい Q5, Q6］。児童・生徒が「なぜそれが事実と言えるのか」「なぜそれが意見なのか」を根拠とともに説明する機会を増やします。
    - **「論理的な思考と表現」の訓練：** ディベートやグループディスカッションを導入し、**自分の意見を論理的に構築し、根拠を明示して他者に伝える練習**を行います［強化したい Q13］。他者の意見の論点や矛盾点を整理し、指摘する演習も取り入れます［強化したい Q8］。
    - **多様な発信者の意図を考察する活動：** 同じテーマを扱った複数の記事や映像（ニュース番組、ドキュメンタリーなど）を比較し、**発信者（著者、製作者）の立場や意図によって伝え方が異なることを分析する**学習を深めます［強化したい Q9, Q10］。

2. **読書活動の充実と情報リテラシー教育の連携**

- **「批判的な読解力」を育む読書プログラム**: 単なる多読ではなく、**異なる視点やテーマをもつ書籍・情報を比較して読み解く**読書会やブックレビュー活動を推奨します［強化したい Q4］。読んだ内容を鵜呑みにせず、**「なぜこの本はこのような主張をしているのか？」「他の情報源ではどうなっているか？」**といった問いを立てる習慣をつけさせます［強化したい Q7］。
- **読書後のアウトプットの多様化:** 感想文だけでなく、**特定の情報や主張に対する賛否を論理的に記述したり、異なる情報源を比較して分析したりするレポート**の作成を促します［強化したい Q3, Q4, Q5, Q6］。

3. **資料やデータの見方・活用の実践的な学習**

- **「確かな情報を見極めるスキル」の徹底指導:** インターネット上の情報（ニュースサイト、SNS、ブログなど）について、**発信元の信頼性、情報の鮮度、他の情報源との比較、裏付けの確認**など、具体的な情報検証プロセスを教え、実践させます［強化したい Q11, Q12］。フェイクニュースや誤情報の事例を取り上げ、見分け方を学ぶワークショップを実施します。
- **情報収集・分析のプロジェクト学習**: 生徒自身が興味のあるテーマについて、複数の情報源から情報を収集・分析し、その信頼性を評価しながら、自分の考えをまとめる探究活動を推進します［強化したい Q3, Q11, Q12, Q13, Q14］。

4. **情報モラル教育の「情報リテラシー」への深化**

- 「相手を傷つけない」という発信側のモラルに加え、**「受け取った情報をどう判断し、どう行動するか」という受信側のリテラシー**を重視します［強化したい Q2, Q7, Q11, Q12］。情報の正確性を疑い、多角的に検証する姿勢を養うための具体的な授業内容を組み込みます。

5. **AI など新たな技術の体験・活用を通じたリテラシー育成**

- **AI 生成情報の特性理解と批判的評価：**AI が生成する情報（文章、画像など）の利便性と同時に、その**根拠の不明確さや偏り、誤情報の可能性**について深く理解させます［強化したい Q7, Q8, Q11］。AI が生成したテキストを検証し、事実と意見、論理の飛躍などを指摘する演習を取り入れます。
- **AI を情報収集ツールとして活用する際の倫理・限界：**AI を情報収集や整理のツールとして活用する方法を教えるとともに、**AI の出力は最終的な判断の根拠ではないこと、必ず人間が検証する必要があること**を強調します。

これらの取り組みを**学年進行とともに段階的に難易度を上げながら系統的に実施**し、教科横断的な連携を図ることで、生徒たちが変化の激しい情報社会を生き抜くために必要なリテラシー能力を包括的に育成していくことが期待されます。

九段中等教育学校におけるＩＣＴ教育

九段中等教育学校では、生徒が学習活動において、情報や情報手段を主体的に活用する能力を育成することができるよう、タブレット型パソコンを整備し、生徒相互に話し合うための情報の共有や学習成果をまとめて発表するなどの活動が効率よくできることをめざして環境整備を以下のとおり進めてきました。

年度	具体的取組内容
令和２（２０２０）年度	・ＩＣＴ教育タブレットＰＣの整備(ＧＩＧＡスクール構想※)
令和３（２０２１）年度	・実習室ＰＣ（ＰＣ教室 44 台、ＬＬ教室 42 台）の更新
令和４（２０２２）年度	・学校管理システム用サーバの更新
令和５（２０２３）年度	・文部科学省実施の生成ＡＩパイロット校に指定（独自生成ＡＩ開発のための導入プロトタイプの開発・検証・活用の実施）
令和６（２０２４）年度	・統合型校務支援システム導入及びＩＣＴ教育用タブレットＰＣの更新、ゼロトラストセキュリティ、クラウド校務環境、校務用スマートフォン導入 ・独自生成ＡＩ「otomotto」開発（10 月より本格稼働） 引き続き生成ＡＩパイロット校指定（区内外への活用事例の波及活動実施） ・文部科学省実施の高等学校ＤＸ加速化推進事業実施校に指定（デジタル分野人材育成の先進的実践校としての実習環境の整備）
令和７（２０２５）年度	・リーディングＤＸスクール事業、生成ＡＩパイロット校、高等学校ＤＸ加速化推進事業指定校の継続（さらなるデジタル人材育成の充実を図るための環境整備と探究を軸とした数理・データサイエンス・ＡＩを含むプログラムの実施、区内学校向けの公開授業や区内小中学生対象の体験講座などモデル校としての実践 ・独自生成ＡＩ「otomotto」運用 ・ＰＣ・ＬＬ教室の環境整備、実習室端末の更新 ・校内ネットワーク設備の更新
令和８（２０２６）年度（予定）	・生成ＡＩの利活用の創出・普及 ・文理横断的な探究活動の推進（令和７年度活動の継続） ・生成ＡＩパイロット校、ＤＸ加速化推進事業指定校

※1 人 1 台端末や高速大容量の通信ネットワーク等の学校 ICT 環境を整備・活用することにより教育の質を向上させ、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現することを目的とした構想(令和元年 12 月文部科学省発表)

九段中等教育学校ICT教育システム全体像

【目的】
・学習環境の改善　・校務効率化（働き方改革）・安全性の担保

【構成図】

統合型校務支援システム
（R6更新）
概要：生徒、保護者、教職員がともに活用するスクール・コミュニケーション・プラットフォーム

九段中等独自生成AI「otomotto」
（R6開発・導入）
概要：全生徒が安心安全に利用・情報が外に漏れず学習されない特定データ（教科書/校内文書等）の活用・プロンプト共有等教育活用機能

PC/LL教室整備
（R7更新）
概要：GIGA端末と差別化した実習室専用の柔軟な運用ができる機器・環境を構築

探究学習環境整備（R6・7 DXハイスクール）
概要：探究的かつ体験型学習促進のための高性能PCやデジタルファブリケーション機器を導入

基盤DX

1300台　**120台**

端末・スマホ（R6更新）
端末（生徒・教職員用）、スマホ（教職員１人１台）の整備

クラウド環境・ゼロトラストセキュリティ
（R6・7更新）
SASE環境でゼロトラストセキュリティ※を実現・ロケーションフリー化

ネットワーク・サーバ（R7更新）
システムクラウド化に伴う帯域不測等の解消・Wi-Fi7対応機器導入

※SASE：クラウド上からネットワークやセキュリティをまとめて管理する仕組みや考え方
ゼロトラストセキュリティ：ネットワーク環境を問わず全てを信頼せず常に検証するというセキュリティの基本概念

生成AIパイロット校（校務利用）

千代田区立九段中等教育学校

～教員の働き方改革を支える生成AI活用～

目的・取り組み概要

生成AIを「教員に代わる存在」ではなく「教員を支える存在」として捉え、教員が本来注力すべき教育活動により多くの時間を充てられる学校づくりを目指す。

（1）生徒に対するフィードバック業務の改善（生徒のレポートや課題等の添削・採点業務補助に生成AIを導入する）
提出物に対する添削・採点の補助内容を自動出力し、教員が確認・修正した上で活用することで、フィードバックの迅速化と質の向上を図る。
（2）授業教材・保護者向け資料作成の効率化授業用資料や保護者向け文書の作成
生成AIを用いて文書やプレゼンテーション資料のドラフト、テンプレート、素材画像を作成する。資料作成に要する時間を短縮し、著作権確認等の負担軽減を図る。
（3）好事例の創出と校内外での共有
教育委員会と連携し、パイロット校としての公開授業・研修会などにより、区内小中学校への展開を見据えた事例提供に貢献する。
（4）インタビューやアンケート等による定性的・定量的評価を行う
負担感の軽減や業務効率化への効果を把握する。

Kudan Creative AI otomotto

学校用にカスタマイズした独自生成AIシステム（otomotto）
【機能】
LLMを選択してチャット／履歴参照／プロンプト共有／回数制限なし
【安心・安全面の配慮】
モデルの学習素材にならない／回答に出典を記載／コンテンツフィルタ

教職員の生成AI活用場面

主な生成AIの活用場面としては、以下の3点となる。

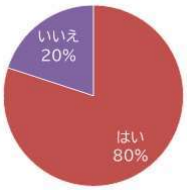
（1）校務文書（文書・資料校正、翻訳）
学年便り等文書作成・添削、メール作成・翻訳、学校HPの記事、その他資料作成・添削
（2）授業・教材（作成補助）
テスト問題作成、考査問題添削、英作文モデル作成、授業アイデア・教材作成、フィードバック補助
（3）ツール作成
プログラム生成・修正



活用効果

2026年1月に教員向けのアンケートを実施した。以下は、アンケート回答の一部抜粋である。

（1）校務において生成AIを用いていますか。



（2）校務の情報化について、ご自身の考えと当てはまるものを次の中から選んでください。

①校務の情報化によって、校務全般が効率化され、負担軽減がなされている。授業改善、業務改善につながっている。	40%
②校務の情報化によって、校務が効率化され、負担軽減につながっている。	40%
③校務の情報化によって、校務が効率化されたが、負担軽減にはつながっていない。	20%
④校務の情報化によって、校務が効率化されたり、負担軽減がなされたりはしていない。	0%

（3）活用場面別　業務時間の削減（回答者の記述を分類）

① 校務文書　　1つの作業につき　20分～2時間削減
② 授業・教材　　1つの作業につき　20分～1時間削減
③ ツール作成　　1つの作業につき　5～10時間削減

校務において、生成AIを活用している教職員の割合は、80パーセントとなった。活用した各業務においては、大きな時間短縮が見られ、業務負担軽減に大きな効果があることがわかる。授業・教材系は教材やテスト作成で効果があり、メール作成では短時間で即効性のある削減効果となった。

具体的な活用
（1）校務文書（通信作成・資料作成）での活用が多く、「文章校正」「下書き生成」「要約整形」といった言語処理での活用場面で重用されている。メール作成のうち、特に英文でのやり取りを行う業務での時間削減で、生成AIを活用することによって、作成した文章の品質改善と時間短縮の効果が確認できた。
（2）授業準備では「思考補助＋作業短縮」での活用（例：テスト作成・添削、英作文のモデル文生成、授業アイデアでの活用）が見られた。
（3）業務自体を生成AIで行うことだけではなく、作業を自動化するためのツール（簡易なプログラム）を作成することにも活用ができた。例えば、特定のフォームに入力された場合に、その内容に応じてメール通知を行ったり、校務用のフォルダにデータを保存する等のツールを短時間で作成できたケースがある。

今後に向けて

生成AIを活用した校務利用については、全体の約80%が「はい」と回答し、一定の活用が進んでいることがわかった。一方で、現状の具体的な校内活用の多くは、校務文書作成・授業準備・メール作成の3種類に集中している。今後、活用の幅が拡がれば、生成AIによって削減された業務時間を別の作業に充てたり、より注力したい業務内容に時間を確保したりすることが可能になる。令和7年度は、区内小中学校の教員向けの生成AI活用研修会を本校で開催し、実際の活用場面について、本校の実践を共有することができた。また、今後の活用によっては業務時間の削減だけでなく、アイディア創出ツールとしてのさらなる活用も期待できる。
今後、生成AIがさらに補助できる業務としては、以下の点が挙げられる。
①保護者・教員・生徒のアンケート結果について、要約・傾向分析・課題抽出を行う業務は教員の負担が大きい一方、生成AIとの相性がよく、業務負担の軽減が期待できる。
②進路指導業務においては志望理由書の添削補助、面接練習用の質問生成などにおいて生成AIが支援することで、生徒一人一人への個別対応をより手厚く行える可能性がある。

また、活用実践例の発信および校内での活用促進に向けては、以下のような取組が考えられる。
①テンプレートの配布による活用場面の可視化
②生成AI活用に知見のある教員による具体的な実践紹介（合同研修会や授業公開）

引き続き生成AIを適切に活用し、教員が本来注力すべき教育活動により多くの時間を充てられる学校づくりを目指していく。

生成AIパイロット校（教育利用）

千代田区立九段中等教育学校

～学びのプロセスを支える生成AI活用教育～

目的・取り組み概要

情報化社会や生成AIの普及を踏まえ、生徒一人一人が主体的かつ適切にICT・生成AIを活用できる力の育成を目指す。

(1)各学年における情報活用能力育成の全体計画を見直し、系統的・継続的な取組を推進していく。
1年生では、生成AIガイダンス後、総合的な学習の時間等を中心に基礎的な活用力や情報リテラシーの育成に取り組む。
2年生以上については、各教科での活用状況を踏まえ、習熟度に応じた情報リテラシー・モラルの育成を図る。
(2)ICT・生成AIガイダンスの内容を継続的に更新し、最新動向を反映した教材の充実を進める。
新たな生成AIサービスを体験的に学ぶとともに、その特性や課題への理解を深め、年間を通じた情報リテラシー・モラルの育成につなげる。
(3)外部講師による生成AI活用研修等を実施し、最新の動向に関する情報収集・取り組み改善を進める。
(4)区内小中学校への普及も視野に入れ、授業公開等を通じた実践事例の創出と共有を図る。
(5)各教科の学習では、課題設定や思考の深化等の学習過程における生成AI活用事例を創出し、活用の幅を広げていく。
(6)アンケート等による定性的・定量的評価を行い、取組の効果検証と改善につなげる。

Kudan Creative AI otomotto

学校用にカスタマイズした独自生成AIシステム（otomotto）
【機能】
LLMを選択してチャット／履歴参照／プロンプト共有／回数制限なし
【安心・安全面の配慮】
モデルの学習素材にならない／回答に出典を記載／コンテンツフィルタ

生徒の生成AI活用場面

現在の主な生成AIの活用場面として、下記に分類できる。

(1)英語(英作文)添削・文法チェック：約43%
(2)国語の作文・文章推敲：約17%
(3)アイデア出し・発想支援：約14%
(4)社会・探究での情報収集／要約：約11%
(5)数学・理科の問題解説：約7%
(6)翻訳・言い換え：約5%

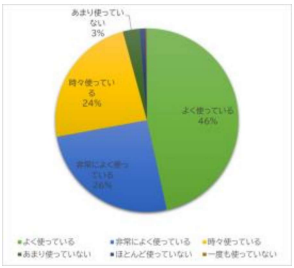
【回答者数：473名】
注：本校は英語教育にも力を入れており、英語科での生成AI活用が進んでいる状況がある



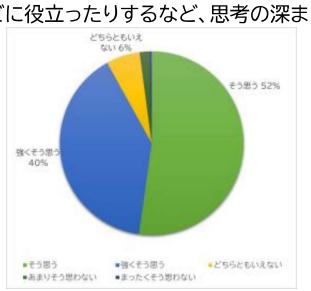
活用効果・生徒の声

2026年1月に生徒向けのアンケートを実施した(回答者数は473名)。以下は、アンケート内容の一部抜粋とその回答である。

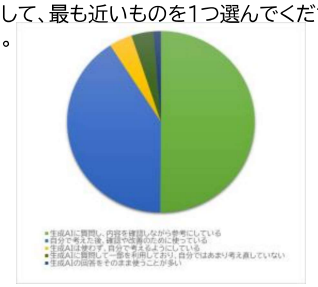
(1)今年度の授業や校内での活動で生成AIをどの程度活用していますか。



(2)生成AIを活用することで、学習内容への理解が進んだり、アイデア出しなどに役立ったりするなど、思考の深まりや広まりがある



(3)生成AIを活用する際の自分の使い方として、最も近いものを1つ選んでください。



(4)「生成AIの活用について、難しいと感じている点があれば教えてください」の主な回答
①情報の真偽・信頼性の判断が難しい
「本当に正しい情報か分からない／間違った情報や嘘が含まれることがある／出典が不明確／存在しないリンクが示されることがある／どこまで信頼してよいか判断が難しい」
②プロンプト(指示文)作成が難しい
「質問の仕方が分からない／条件を細かく指定しないと意図が伝わらない／プロンプトを考えるのに時間がかかる／レベル・文字数・ニュアンス調整が難しい」
③依存・思考力低下・距離感への不安
「頼りすぎてしまう／自分で考えなくなりそう／AIの意見と自分の意見の境界が曖昧になる／課題の答えをそのまま見てしまう」

(5)「生成AIの活用について、よかった点や工夫している点について教えてください」の主な回答
①作業効率・時間短縮
「調べ物や情報収集の時間が大幅に短縮された／多くのサイトや動画を見る必要がなくなった／書類作成・課題・宿題がはかどる／すぐに回答が返ってくる」 ②アイデア創出・視点拡張への効果
「自分では思いつかないアイデアを出せる／多様な視点・反対意見を提示してくれる／思考の出発点になる／発想の幅が広がる」
③添削・推敲・理解支援としての有用性
「英語作文・国語作文の添削が早く、分かりやすい／間違っているの理由まで説明してくれる／自分では気づかなかったミスを指摘してくれる／要約や説明が非常に分かりやすい」
④依存を避けるための主体的な使い方の工夫
「まずは自分で考えてから使う／全部をAIに任せない鵜呑みにせず、必ず確認・ファクトチェックを行う／AIの案をそのまま使わず、自分の言葉に直す」

アンケート結果から、生徒にとって生成AIは、「思考を代替する存在」ではなく、「思考を支援・拡張する道具」として位置づけられ始めていることが分かった。その一方で、その効果を十分に引き出すためには、使い手側の判断力・問いの立て方・距離感の調整が不可欠であることも明らかとなった。
生成AIを「便利な道具」として終わらせるのではなく、生成AIを用いて、問いの立て方や使い方そのものを学ぶ機会を設計していくことが重要であると考える。

今後に向けて

生成AIの活用を単なる利便性の向上にとどめるのではなく、「どの場面で、どのように使うか」を明確にした指導を行っていく必要がある。具体的には、まず自分で考えることを前提とした上で生成AIを活用することや、生成AIの回答を鵜呑みにせず、他の資料と照合しながら検証する姿勢を育成することが重要である。また、生成AIへの指示文(プロンプト)を工夫する力は、学習内容を整理し、自らの考えを言語化する力と密接に関係している。今後は、プロンプト作成を含む「対話力・質問力」を学習スキルの一つとして位置づけ、生徒が試行錯誤しながら活用方法を振り返る機会を、意図的に設けていくことが求められる。これらの取組を通して、生徒が生成AIを「答えを得るための道具」としてではなく、「思考を深めるためのパートナー」として主体的に活用できるよう、継続的に取り組んでいきたい。

今年度は、生成AI活用に関して外部講師を招聘するとともに、区内小中学校への普及を目的とした研修会を開催することができた。今後も学校内外の関係機関と連携しながら、本校における取組のさらなる発展と、地域への還元を引き続き行っていく。

資料５　千代田区第４次基本構想

「千代田区第３次基本構想～千代田区新世紀構想～」については、策定から約20年が経過しており、また、新型コロナウイルス感染症の流行や、全国の傾向とは異なる人口の動態・推計結果など、区を取り巻く状況は大きな転換期を迎えています。こうした状況を踏まえ、千代田区第４次基本構想を策定しました。

本区の人口推計結果では、当分の間増加傾向が続く見通しであり、全国の傾向とは異なる特徴があります。そのため、日本の人口減少に伴う労働力の不足など全国的な課題を捉えながら、今後も複雑化、多様化していく行政需要に対応していかなければなりません。加えて、区を取り巻く社会情勢は変化が激しく、これまで以上に変化の要因やスピードが増加することが想定されます。

そのため、新たな基本構想では、時代の変化により色あせることのない普遍的な将来像を示すことによって、多くの方々と向かうべき方向性を共有するとともに、変化に対してより一層柔軟な対応のできる行政運営を推進していきます。

千代田区第４次基本構想では、めざすべき将来像として、「伝統と未来が調和し、躍進するまち～彩りあふれる、希望の都心～」を掲げるとともに、これが実現したまちと人々の暮らしの姿である、「分野別の将来像」を定めました。

● 第４次基本構想における行政運営の推進について

千代田区第４次基本構想のもとでは、変化の激しい社会経済情勢に柔軟に対応していくため、基本計画に代えて「基本構想」と「将来像に向けた方針」を軸に行政運営を推進します。

「将来像に向けた方針」は、基本構想に掲げる将来像の実現をめざし、分野別計画や新たに生じた課題を踏まえた施策の中期的な取組みの方針を示すとともに、毎年度の予算編成の際には、区民等を取り巻く環境の変化を的確に捉え、その認識や考え方の不断の見直し、更新を行うことで、変化の激しい社会に対応していくものです。

「めざすべき姿」及び「基本構想の実現に向けて」ごとの方針を踏まえ、時勢に応じた区民本位のサービスを展開していきます。

千代田区第４次基本構想

（めざすべき将来像）

伝統と未来が調和し、躍進するまち～彩りあふれる、希望の都心～

（めざすべき姿）

（分野別の将来像）

自分らしく健やかに暮らし、笑顔で成長しあえるまち

- 多様なライフスタイルやライフステージに応じ、安心して子育てができています。
- すべての子どもたちの個性や意思が尊重され大切に育まれながら、すくすくと成長しています。
- お互いに支えあい、誰ひとり取り残されることがなく、自分らしく、自立した生活を送ることができています。
- 衛生的な環境のもと、いきいきと健康に暮らしています。
- 生涯にわたり学びやスポーツに親しむことで、充実した人生を送れるようになっています。
- 伝統や歴史、文化芸術に触れ、受け継ぎ、学んでいくことで、心が豊かになっています。

（分野別の将来像）

集い、つながり、活気とにぎわいのあるまち

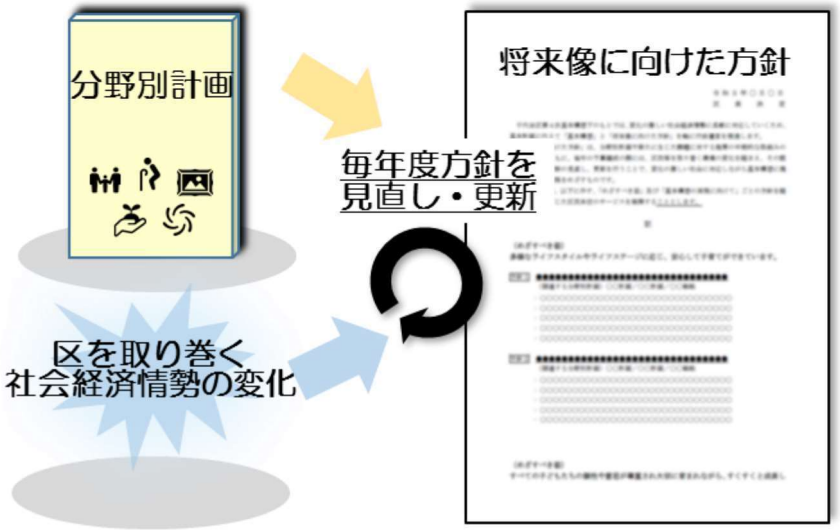
- 活発な事業活動により、地域がうるおい、豊かな暮らしを享受できています。
- 人とのつながりが感じられ、支えあうことができています。

（分野別の将来像）

やすらぎを感じ、安心して快適に暮らせるまち

- 良好な環境が次世代に継承され、このまちに愛着や誇りを感じています。
- 人にやさしいまちづくりにより、便利で快適な都心生活を送っています。
- 地域特性を踏まえた強靭な都市基盤や災害に備えた体制のもとで、安心して暮らすことができています。

基本構想に掲げる将来像の実現をめざす



将来像に向けた方針とは

- ✓ 基本構想に掲げる将来像の実現に向け、分野別計画や新たに生じた課題に対する施策の中期的な取組みの方針を示すもの
- ✓ 区を取り巻く環境の変化を踏まえ、不断の見直し・更新を行う

※　社会経済情勢に特段の変化がなければ、前年度の方針を継続して推進していきます。

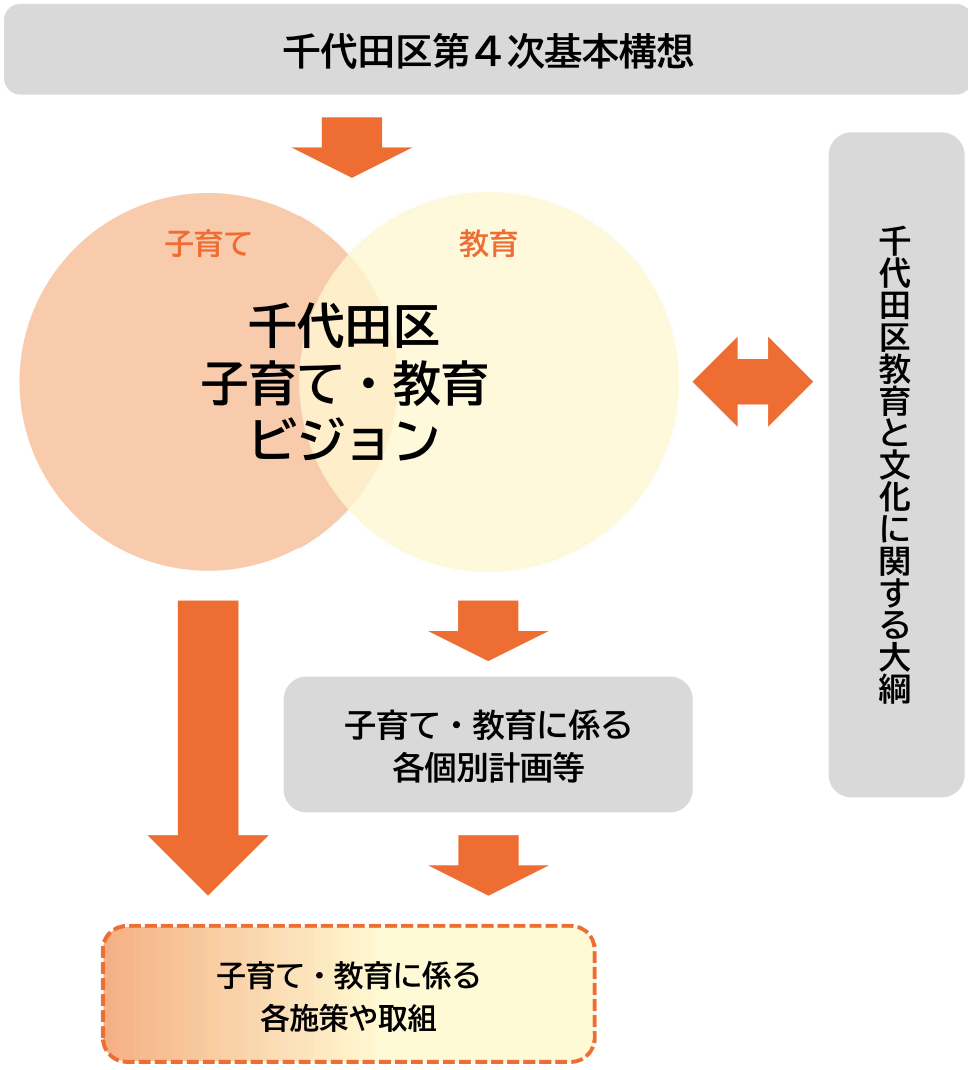
資料６　千代田区子育て・教育ビジョン

１　子育て・教育ビジョンとは

○　千代田区は、令和５年３月、区の将来像や分野別のあるべき姿を描き、その実現に向けて進むべき方向性を示すものとして、「千代田区第４次基本構想」を策定しました。本ビジョンは、同基本構想を踏まえつつ、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第１条の３に基づき区長が策定する「千代田区教育と文化に関する大綱」との整合性を図ります。

> 地方教育行政の組織及び運営に関する法律
> 第１条の３　地方公共団体の長は、教育基本法第 17 条第１項に規定する基本的な方針を参酌し、その地域の実情に応じ、当該地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱（以下単に「大綱」という。）を定めるものとする。

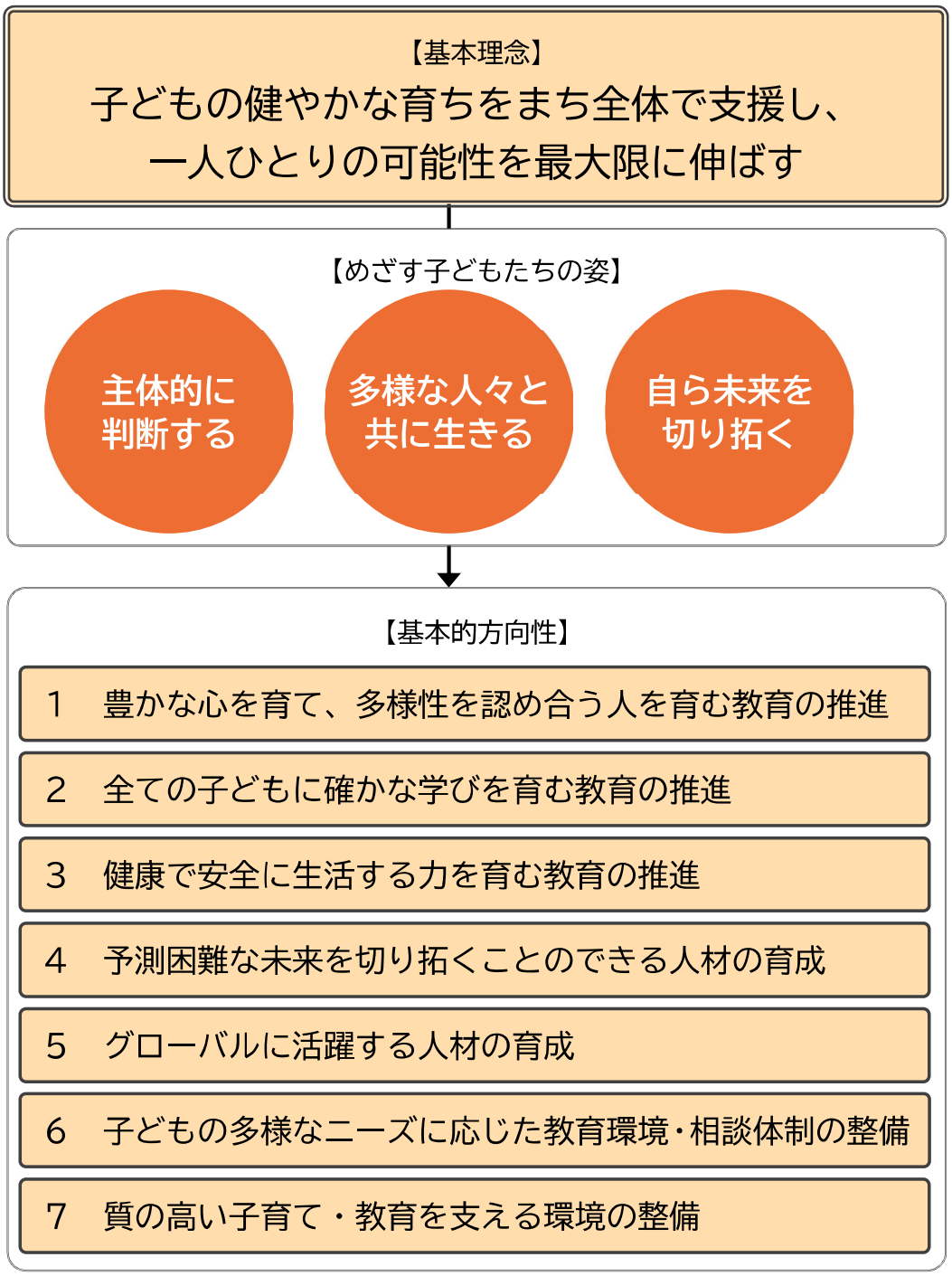
■イメージ図



２　子育て・教育ビジョンの体系

基本理念を実現するために、「めざす子どもたちの姿」を掲げ、具体的な施策展開のために基本的方向性を示します。

地域全体で子どもを見守り、めざす子どもたちの姿を実現できるよう、基本的方向性に従った施策を実施します。



３　めざす子どもたちの姿

「千代田区子育て・教育ビジョン」では、未来を担う千代田区の子どもたちの姿として、次のような人づくりを目指します。

（１）主体的に判断する

◎習得した知識・技能を思考・判断・表現に生かす人
◎失敗を恐れず、様々な課題に意欲的に取り組める人
◎情報を読み解き自己の信念に従って行動ができる人
◎自己肯定感や自尊感情をもち高めることができる人

（２）多様な人々と共に生きる

◎周囲の人と対話し、協働して課題を解決できる人
◎感性を磨きつつ、思いやりや慈しみの心をもつ人
◎多様性を受け入れ、他者の価値観を尊重できる人
◎自国の文化や地域を理解し、愛着と誇りをもつ人

（３）自ら未来を切り拓く

◎高い志をもって、現実と向かい合うことのできる人
◎社会の変化を柔軟に受け止め、粘り強く挑戦する人
◎自己の学びを他人や社会のために生かそうとする人
◎未知の課題を発見、解決し新たな価値を創造する人